

*本リストは、村上テクストにおける《行方不明》《不在》《欠落》のモチーフが存するテクストを明記し、解説する。

《行方不明：ゆくえがわからないこと（『日本国語大辞典』第二版より：以下同様）》は、村上テクストに多く登場する〈seek and find〉に関わり、多くの長・短編に組み込まれている。《不在：その場所にいないこと》は、テクストに登場する対象が死んでいる場合の《不在》＝「死」の不在と、その人物が《行方不明》になって生じる《不在》の二つが特徴。《欠落：一部分が欠け落ちること》は、その人物の人間性が《欠落》している場合が多い。また、《欠落》に至る前段階として、《喪失：失うこと。現代では主として、抽象的な事柄についていう》という動きが見落とせない。《喪失》は〈seek and find〉や《不在》と密接に関わっている。

【長編】：長編は《行方不明》《不在》《欠落》が複合的に合わさっている場合が多いので、それぞれについて叙述する。

・「風の歌を聴け」（初出：'79・6）…三番目に寝た女の子（「死」の不在）、「僕」の喪失感（鼠という半身が登場（分裂）、「存在理由」の喪失）

*「僕」は鼠（半身）や三番目に寝た女の子（「存在理由」）などを失っているが、決定的な《欠落》感ではなく、過ぎ去る夏のように失いつつある状態として描かれている。

・「1973年のピンボール」（'80・3）…直子（「死」の不在）、3フリッパーのスペースシップ（行方不明）、鼠の病（人間性の欠落）

*直子を失い、3フリッパーのスペースシップを捜す〈seek and find〉としての《行方不明》が登場。また、鼠の病（人間性の欠落）が決定的な形で進んでゆく。

・「羊をめぐる冒険」（'82・8）…鼠（行方不明）、羊（行方不明）、耳の女（行方不明）

*〈seek and find〉としての《行方不明》が物語の形で機能している。「僕」が羊を捜す過程において、「僕」は自身の半身をなくしてゆく。全体として失われてゆく物語。

・「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」（'85・5）…博士（行方不明）、楽器（行方不明）、唄（欠落）、心（欠落）

*〈seek and find〉としての《行方不明》が軸。寓話的設定によって、新しい《欠落》の形が描かれている。失われる人生が「私自身」と認識する物語

・「ノルウェイの森」（'87・9）…「僕」（人間性の欠落）、キズキ（「死」の不在）、直子（人間性の欠落→「死」の不在）、レイコさん（人間性の欠落）、永沢（人間性の欠落）

*「死」の不在と人間性の《欠落》のもたらす三角関係が基軸。〈seek and find〉としての《行方不明》がない。

・「ダンス・ダンス・ダンス」('88・10) …「僕」(心のふるえの欠落)、キキ(行方不明)、五反田君(人間性の欠落)、ユキ・アメ・牧村拓(人間性の欠落)

*「僕」は去っていった人々が残していく《欠落》《不在》を感じ、自らが失われつつあることを痛感しながら生きている。死ぬ人々は「僕」の影。僕の《欠落》の代わりに人が死んでいくが、最後に求めるもの(ユミヨシさん)を見つけ、回復する。

・「国境の南・太陽の西」('92・12) …「僕」(人間性の欠落)、島本さん(行方不明)、イズミ(「僕」によって人間性が欠落)

*次例のように《欠落》を抱えた人間である「僕」は、人を傷つける(悪をなしうる)人間として描かれている。

僕が抱えていた欠落は、どこまでいってもあいかわらず同じ欠落でしかなかった。どれだけまわりの風景が変化しても、人々の語りかける声の響きがどれだけ変化しても、僕はひとりの不完全な人間にしか過ぎなかった。僕の中にはどこまでも同じ致命的な欠落があって、その欠落は僕に激しい飢えと渇きをもたらしたんだ。僕はずっとその飢えと渇きに苛まれてきたし、おそらくこれからも同じように苛まれていくだろうと思う。ある意味においては、その欠落そのものが僕自身だからだよ。(『国境の南・太陽の西』15)

・「ねじまき鳥クロニクル」('94・4、'97・10) …猫(行方不明→女がクミコとわかって戻る)、クミコ(行方不明→綿谷ノボルと対決し戻る)、シナモン(声・自身の存在理由の欠落)、笠原メイ・加納クレタ(人間性の欠落) …間宮中尉(失われた人生)、ナツメグ(服に対する情熱)

*「ねじまき鳥」である「僕」が《欠落》を持つ人物をつなげていく。これまでのような《欠落》の主人公が中心の物語とは異なり、世界が広がっている。

・「スプートニクの恋人」('99・4) …すみれ(行方不明→戻る)、ミュウ(欠落:半身と分かれ、すみれを失い、その欠落はよりすすむ)、ぼく(すみれの不在→解決)、猫(行方不明)

*《行方不明》のすみれを探すという〈seek and find〉が存在するが、「ぼく」が直接関わらない形ですみれが唐突に戻ってくる。《行方不明》としては不十分の感がある。

ミュウの姿はぼくに、人々がひとり残らず去ってしまったあとの部屋を思わせた。なにかとても重要なものが(それは竜巻のようにすみれを宿命的に引き寄せ、フェリーのデッキにいるぼくの心を揺さぶったなにかだった)、彼女の中から最終的に消滅していた。そこに残されているいちばん重要な意味は存在ではなく、不在だった。生命の温もりではなく、記憶の静けさだった。(『スプートニクの恋人』16)

・「海辺のカフカ」('02・9) …「僕」(家出:主人公が行方不明。母・姉から捨てられ、

その不在を強く感じる)、「僕」の父(人間性の欠落)、ナカタさん(戦争中の事故から「影」を失い、半身欠落)、サエキさん(愛する者を失い、半身欠落)

*《行方不明》のモノを主人公が探す形ではなく、主人公自体が行方不明(家出)をする形に変更されていることが特徴。主人公「僕：田村カフカ」よりも、ナカタさん側の物語に〈seek and find〉が存するが、「カーネルサンダース」らによって、それら(入り口の石など)はテンポ良く見付き、出会う人間同士のつながりに重点が置かれている。

・「アフターダーク」('04・9) …エリ(眠り続ける：自分自身の欠落)、マリ(姉の不在)

*〈seek and find〉はない。姉の《欠落》が見られるが、長編のテーマは《行方不明》《不在》《欠落》が中心ではなくなっている。

【長編解説】 殆どの長編で《行方不明》《不在》《欠落》というモチーフが使用されていることから、村上文学の中心と言える。ただ、最新作「アフターダーク」ではそれほど重要なモチーフとなっていない。今後、《行方不明》《不在》《欠落》ではない形に進んでいくのか、それともまた新たな形で描くのか、その方向性が注目される。

【短編】：短編は短い分、モチーフが明確であり、村上はそのことを自覚し作成しているので、テーマ別に分ける。複合的なものは、最後に叙述する。

・「中国行きのスロウ・ボート」('80・4) …中国人女子大生(行方不明)

・「納屋を焼く」('83・1) …彼女(行方不明)

・「象の消滅」('85・8) …象・飼育係(行方不明)

・「レーダーホーゼン」('85・10) …彼女の母(家出)

・「双子と沈んだ大陸」('85・冬) …双子(行方不明)

・「ねじまき鳥と火曜日の女たち」('86・1) …猫(ワタナベノボル)(行方不明)

・「TVピープル」('89・6) …妻(行方不明)

・「UFOが釧路に降りる」('99・8) …小村の妻(家出)、箱(喪失)

・「アイロンのある風景」('99・9) …順子(家出)、三宅(失踪)

・「どこであれそれが見付きそうな場所で」('05・5) …夫(行方不明)

・「日々移動する腎臓の形をした石」('05・6) …キリエ(行方不明)

・「品川猿」('05・9) …名前(行方不明)

【短編：《行方不明》解説】 長編でも言えることだが、《行方不明》になるのは女性が多い。長編の場合、《行方不明》の女性を捜すことで物語が成立していくが、短編の場合は、唐突な失踪の形でその解決がない。それは短い文章の中で印象付けを行うための、一つの方法と言えるだろう。ただ、最近の作「どこであれそれが見付きそうな場所で」、「品川猿」では、《行方不明》の人・モノが見つかるパターンが見られ、村上の変化の過程と捉えられる。

・「鹿と神様と聖セシリア」('81・6) …「僕」の小説(感情の欠落)

・「カンガルー通信」('81・10) …「僕」(書き言葉の欠落)

・「パン屋襲撃」('81・10)、「パン屋再襲撃」('85・8) …「僕」、相棒、「僕」の妻(空腹感)

・「今は亡き王女のための」('84・4) …彼女(人間性の欠落)

- ・「BMWの窓ガラスの形をした純粋な意味での消耗についての考察」(84・8) …彼（人間性の欠落）
- ・「眠り」(89・11) …私（眠気の欠落）
- ・「加納クレタ」(90・1) …加納クレタ（男に犯されるという欠落）
- ・「沈黙」(91・1) …大沢さん（人を信じること・喪失）、青木（人間性の欠落）
- ・「氷男」(91・4) …私（コミュニケーションの喪失）
- ・「トニー滝谷」(90・6) …トニー（妻の喪失）、妻（欠落）、省三郎（人間性の欠落）
- ・「レキシントンの幽霊」(96・10) …ケイシー（愛してくれる人の欠落）
- ・「タイランド」(99・11) …子ども（喪失）

【短編：《欠落》解説】《欠落》は人間性の欠落が多いが、短編にはそれ以外のヴァリエーションが見られる（感情、言葉、空腹感、眠り等）。村上テクストの場合、一部分が欠けることで、そのものの存在が全て歪んでしまい、そのことで非現実な物語空間が成立している。また、主人公と相対する人間の《欠落》が描かれるとき、主人公はその人物に対する憎しみを隠さない。近年は「愛」を失うモチーフが多く見られることが特徴である。

- ・「午後の最後の芝生」(82・8) …大女の娘（不在）
- ・「土の中の彼女の小さな犬」(82・11) …「僕」の彼女（不在）、犬（「死」の不在）
- ・「螢」(83・1)、「めくらやなぎと眠る女」(83・12)、「めくらやなぎと、眠る女」(95・11) …彼（「死」の不在）
- ・「七番目の男」(96・2) …K（「死」の不在）
- ・「神の子どもたちはみな踊る」(99・10) …父（不在）
- ・「ハナレイ・ベイ」(05・4) …息子（「死」の不在）

【短編：《不在》解説】「死」の《不在》が多い。死という《不在》によって、生き残った者は逆により濃密に死者の存在を身近に感じ、自身の存在・行動に大きな影響がもたらされている。その場にはいない場合の《不在》でも同様。

- ・「街と、その不確かな壁」(80・9) …心（欠落）、彼女（喪失）、彼女の影（死）、街（喪失）、幽霊（欠落）→「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」へ
- ・「雨の日の女 # 241、# 242」(87・1) …物理教師（死）、アパートの若い女（行方不明）、雨の日の女（永遠に消える）
- ・「人喰い猫」(91・7) …「僕」、イズミの家庭（喪失）、猫（行方不明）、イズミ（行方不明）→「スプートニクの恋人」

【短編：複合パターン解説】短編におけるモチーフ（《行方不明》《欠落》《不在》）が複合的に重なるパターンは、長編に組み込まれていくようである。基本的に短編というフォーマットは一つのモチーフに徹したものが多い。それが複数になると、より大きな容れ物が必要となる。または、短編集のコンセプトから外れてしまうので『全作品』という形での発表となっている。

【超短編・童話】

- ・「グレープ・ドロップス」(81・11) …グレープ・ドロップス (行方不明：家出)
- ・「あしか」(81・10) …あしか (虚無感：人間性の欠落)
- ・「5月の海岸線」(81・7) …海岸線 (欠落)
- ・「サウスベイ・ストラッド」(82・2) …若い女 (行方不明)
- ・「図書館奇譚」(82・6～11) …母の死、「不思議な図書館」… (母・むくどり、羊男、美少女：喪失)
- ・「駄目になった王国」(82・12) …彼 (完璧だった彼が二流になっていく姿・喪失)
- ・「羊男のクリスマス」(85・11) …ドーナツ (欠落)、「ドーナツ化」(86・6)、「ドーナツ その2」(86・6)、「ドーナツ、再び」(87・1) …ドーナツ (欠落)、
- ・「青が消える」(92) …青の欠落
- ・「天井裏」(94・6) …家・妻 (行方不明)

【超短編・童話：解説】超短編・童話は村上が頭の体操的に楽しんで描いているものが多く、モチーフを深くつっこんだものは少ない。ただ、「ドーナツ」は、村上が拘っているモチーフと言える。その中で「5月の海岸線」は村上の本音が出ており看過できない重要なテキストである。

【総括】

- * 《行方不明》は多くの長・短編に組み込まれ、対象は女性が多く、主人公(「僕」)が探し求めることで物語が動いてゆく(〈seek and find〉)。また、初期は自身の影(鼠)を追い求めるパターン、それ以降は自身の存在と関わるモノ(唄・猫)が行方不明となり、主人公たちはそれらを探す過程で自分自身の存在について違った立場から考えさせられる。長編では《行方不明》のモノを探すことで物語が動き出すが、短編では消えることで現実世界と別世界の境界の曖昧さが強調されている。いずれにせよ、村上テキストにおいて重要なモチーフであることは間違いない。
- * 《不在》は、「死」と関わるものと、その人物が《行方不明》になって感じる《不在》の二つに分かれる。また、次例のように、存在と不在の境界は曖昧で、不在感が逆にその存在を強調することも特徴である。

その封筒が消えてしまったという事実を僕が認識し、僕の意識の中でその不在と存在とが位置をはっきりと交換してしまうと、封筒が存在するという事実が付随して存在していたはずの現実感も、同じように急速に失われていった。それは眩暈にも似た奇妙な感覚だった。僕がどのように自分に言い聞かせようとしても、その不在感は僕の中でどんどん膨らんで、僕の意識を激しく浸食していった。その不在感はかつてそこに明確に存在したはずの存在感を押しつぶし、食欲に呑み込んでいった。(『国境の南・太陽の西』15)

「まったく変な男だ(引用者注：デック・ノース)、と僕は思った。死んでからの方が存在感がある」(『ダンス・ダンス・ダンス』36)

* 《欠落》は人間性の欠落が多い。主人公「僕」に関する欠落と「僕」と対決する人物の欠落、存在そのものを揺さぶる欠落のパターンが見られる。それぞれの《欠落》は一部分でしかないのだが、存在そのものが歪んでしまっている。この歪みによって、村上独特の、現実と非現実の境界が曖昧な物語空間が生まれている。

[やまね・ゆみえ 広島国際大学・鈴峯女子短期大学非常勤講師]